





古今事考

一 先師評

四十七條

一 同門評

四十五條

一 故實

二十五條



一 旅行地

早稲系

去来抄



先師評

外人の評可うといへども先師の一言を
あつちあつちと聞きしに

一

炭俵

遠某の関をへ侍勢の神使

と云

深川よりのみよ此句さぬく評をうけいへり
とありき事年曰都古々の使ともあり侍勢と侍
元日の式は今やあるに神代を思ひ出せ侍中
や道祖神の御中をささるかきまふと社形
と侍師返事と侍勢のよる人言位へ使候

本よりけほろかぬより風光の人を感動せしむる
耳まけるにゆきと之師曰汝ら得て風雅は修る
るべき也と授受し授けし修むるなり

四

猿蓑

は本戸や院のさしきりて冬は月其角
猿蓑の標の時けしを書送る下を冬の月をその月
と云然し修るより一歩も修りて文字は修るに繁
の戸をて修らうと之師曰角を冬を修らうと
句をあらわしきりて冬の月をその入集するを修大
律より之師の教は本戸の戸をあはれけ本戸也
かゝる修るは二つとも大ゆきと云修むし修むるは
と云改むしと云凡此曰本の戸は本戸と云る勝劣

形去来曰け月はけ本の戸にきて人きり守常の
氣あかりを城門よりして人守りて其風はあ
まふおきあふおきり外角を冬を修らひけ
こゝろなり

五

猿蓑

星次り一思ひしる射猫の意 越人
之師修らうけし句は書修るて曰んは風雅あり
その一夜は修らうと云事外修ら風流は修ら
て本性を修らうと云是より其も越人右曰方
より人のあはれを修らうと云一修むるは
むらゝ初て本性を修らうと云は修むるなり

六

猿蓑

風よりその月を吹らるる 荷等

に押さの顔はさうなりし今の冠をさすて白ひ
るおん先師曰ふあまふんそこおろおろし信徳
人の世やあまふん十か形ははも振るあまふ
信徳はるくし

十三

猿蓑

田乃倉りのまはけはひりさる万平
は白袖と先師の正分なり凡牝白く猿蓑撰
の時凡牝曰は白身はさる除之し幸年曰
田の倉りのまはけはひりさるの系はあまふ
凡牝ゆらさす先師曰はけは我捨せん幸ひ
信徳の連中白くは似るあまふれをさすては白く
さるははる万平白くはあまふり

十四

大蔵

元の五文をよきまをさすて中白く幸年曰は
あま有るあま一信徳白くは福をさすては
諸人のわのま事ゆき幸年白くはあまはる
吉人凡牝はさして明くは信徳をさすて人を恨み
山野はさしひ信徳はさしひあま命のあはる凡牝
あまはあま幸年の融けしはる名はあまあり
形は信徳尚るたはる守徳と先師は決るは先師
曰はさるは信徳はさるあまははる凡牝大蔵を
冠は先師曰はけは一日千軍の融けしはる
さるあまははる大蔵はさしひはる

奈れ又八と角う様はしめぬにひしき事をも
とれぬすし野々を句にたうたきしるの生れの
山越つて日一吟けりけりしけり昔海山の
おもむけ人かきけたり今てあふ事をもうす
とらいつてきりぬひしき事をもたうたきし

五

病后のおきもあつて旅ねり芭蕉
泉の節のる小雛は甲しむるおれり
様この權の時節はる奈すし一也凡北日病后
とやうな事ぬきし少海をもたうたきしひしきの
かけりし事ぬきし一減り一秀後也と云去来日

船り白の路りしとく其の事を一侍る
時とらうりしとくおん病后は格もく延速して
いそぐな夜は果し思ひはんと漏しぬふ女白
おし入果ゆき存之師曰病后は小雛はと
たれぬぬる漏しとらうと免ひぬるなり

六

岩窟やなまもとく月乃かの去来
先師上及の付去来日西堂をけ句は月の様は
侍るしとくは客勝もたうたきしとく先師曰
様とく何事と女無句はいふとひて様は
去来日明月はなすしとく山野を吟よし侍る小岩
願ふ又一人の駭客をらん由たるはと先師曰又

元禄四年
二月日記
山野道
遠く
岩窟
客をらん

も独月のあつたのれく名のり出ん我米たるの
風流せん〜自稱の句を遊ばへ〜け句ハ我も
既言〜て其の小文も支ぬ〜遊ん〜る趣向は
尚二三等とてり作りあ〜ん之師の意を以てんれ
か〜拙者の感も有りませ

退て考ふる自稱の句は約三句を我々の換しうりて遊の
句は尚さるる事十倍せり体は作者その心付をさる
り

及びの小文集ハ之師の自撰の集之名を以て
未書とせん〜る事箱中も〜て近代ま〜り〜りけ句
中りハ〜り〜り何句ハ〜り〜り入り〜り〜り句ハ
之師自〜り〜り人〜り〜り小文集〜り〜り句ハ
〜り〜り稀ある〜り〜り事ハ〜り〜り

(サ一)

うはく海ら薬ヤ権カンのモトにた〜り〜り文章
之師秘授の病床小〜り〜り病の句をす〜り〜り
より我の死後の句ハ〜り〜り其の句を〜り〜り
旅〜りの句を〜り〜り其の句を〜り〜り
〜り〜り言ふ〜り〜り其の句を〜り〜り
〜り〜り言ふ〜り〜り其の句を〜り〜り

(サ二)

け句秘に〜り〜り其の句を〜り〜り
〜り〜り言ふ〜り〜り其の句を〜り〜り
〜り〜り言ふ〜り〜り其の句を〜り〜り
〜り〜り言ふ〜り〜り其の句を〜り〜り
〜り〜り言ふ〜り〜り其の句を〜り〜り
〜り〜り言ふ〜り〜り其の句を〜り〜り

事ハ

Handwritten notes in a different script, possibly Latin or a foreign language, located at the top of the right page.

あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は
あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は

(廿五)

巴風

と申すはさうやあつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は
あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は

(廿六)

吉牛

あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は
あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は

いふやうに申すはさうやあつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は
あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は

(廿七)

史邦

あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は
あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は

(廿八)

字次

あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は
あつちの口は時を知らずと申すはさうやあつちの口は

猿木の撰の射するの公衆を致して救うか
まじき事なり一とを神の命なりとて
言ふ事なり 亦も外に言ふ事なり
此も亦も今も言ふ事なり

廿九

玉樹のたけあけしや 親の教 去来
初ら面を新めおるるよ 玉樹のたけあけし
はまのあけしは神に海をうかすなり 玉樹の
かゝるもよしとて神に海をうかすなり 玉樹の
あけしは神に海をうかすなり 玉樹の
あけしは神に海をうかすなり 玉樹の
あけしは神に海をうかすなり 玉樹の

あつ其のふとまの白く形事成るに海くたの
このみおけしとて神に海をうかすなり 玉樹の
初らの輩の覚悟ある事なり

あけしは神に海をうかすなり 玉樹の

卅

夕涼みを絶えおししや 去来
吊り初らあの時なるは 玉樹のたけあけし
はまのあけしは神に海をうかすなり 玉樹の
あけしは神に海をうかすなり 玉樹の
あけしは神に海をうかすなり 玉樹の

卅一

元北日は去来白田を 玉樹のたけあけし
去来白田を 玉樹のたけあけし
去来白田を 玉樹のたけあけし
去来白田を 玉樹のたけあけし

震動
乃靜

先典より傳つて來たるの字を仁壽と附行る
先師乃形つたおうりも又氣を能考てはるを
出は先師曰いよ是のて身な神一傳り也一
曰氣をその中余は極短能くしるんや神の付
ゆる能くするは氣のまを極する氣といふ
なり形一氣のてしるを極するなり一
身出つてはるなり先師曰わたり神の付ぬる
棒形も一神陰を能くするなり一今この五
文よなり形つたなり

世五

梅の葉は枝の百あり 去來
是ハ歲旦の口キ也先師曰わたり神の付ぬる
棒形も一神陰を能くするなり一今この五
文よなり形つたなり

氣のたぬる去來いよはのあまなり 歲旦の氣は
目ハもなるなり

世六

形ハ氣ハあまなり馬 去來の氣
許六神ハ在るを分けてはる先師ハ
何れもその神曰今もなるなり神ハ
是もなり、神ハ氣ハ長なるなり神ハ
六ハ何れもなるなり神ハ長なるなり神ハ
馬の氣ハなるなり神ハ長なるなり神ハ
らなるなり神ハ長なるなり

世七

弓張の角を一 出は月のもら 去來
去來問曰はるなり神ハ長なるなり神ハ
長なるなり神ハ長なるなり神ハ長なるなり

あつひおきこ角こら彦月といふひの二句よめす

廿 猿蓑

つ川ちうさゆふあはれりしり 凡北
初ら番重てん凡北日辰重のるしちしり先師曰
嫌あふしりすれ百負ていふる二句よめ可し
句あつてよめん凡北あふいしり

廿九

書よめ雅子の如を細す 去来
初と雅子のうろててし先師曰去来
ふしりしりや凡北のいふあつていしり
あつてはなるおとせり

卅

らんてぬゆる池の蓮の實
咲花よかき出り椽のかさむり 去来

けそあふ出たる時去来曰かゝるあふを所て入す
とてお別あふれはしり外先師曰附を本
はかかてはしり

櫻の
木の死

卅一

くろてて高き櫻の木の葉
咲花よあつていしり門出川入つて
けそあふ出きる時去来曰あふよ神櫻木の葉の
るをいぬりしり葉を分りなりしり花を付た
むつていしり先師曰あふをえきしりか
んてはぬの如

上篇
の後

卅二

あやの葉さふらつて日の光
ほつていしりあつていしり
去来

詞の施を二反もあらうとて言ふことなり

〔五〕

は、芽生ゆるおのころに、ついでに、
先師の語り神波の文の結文は、けりといふことなり
けりといふは、けりといふの、其の結文は、けりといふことなり
かゝることを、けりといふことなり

〔六〕

赤人の名は、けりといふことなり
先師の文の、白中を、けりといふことなり
けりといふことなり

〔七〕

弱東の本曾の、けりといふことなり
今も、けりといふことなり

あるや、あつた月の、けりといふことなり
先師曰、けりといふことなり
けりといふことなり

去来抄

同門評

凡篇中の畧評は、是れを、けりといふことなり
けりといふことなり

〔一〕

時あ、柳の、けりといふことなり
浪化集、けりといふことなり
史邦、けりといふことなり
けりといふことなり

あまの外人のひたすら

⑤ 春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら

⑥ 春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら

春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら

⑦ 春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら
春のあまのひたすら
秋のあまのひたすら

八 卯の辰は月毛の弱のおおきき 汗六
 去身白くは越向ありし句ふまぬのたはまき
 とこのく月毛てきた毛さるは行はあけり此の
 まゝと金とよきあまのたはあは種なすお梅
 ちか月毛川原毛かきねしめさしく首尾せ
 さいさいののち汗さる句さるてあやを嘆
 す 富士右進依りしあは大名の名さる山田
 依ちりといふを一字をかきた名あのみと
 先脚白く潤ひ海まの古流は子遊せといふも
 けしめし

九

昔の昔はくはくはなれはる 作意

起るぬはくはくはなれはる 杜の
 干飯はなりくはや油角 雪之
 去身白くは越向の連はは依りて風あり是れ
 師の一脚ありて連はは存意ありあはのたはる
 其をさるはくはくはなれはる
 去身白くは越向の句或はくはくはなれはる
 いふはくはくはくはなれはる 依りて連はは上も
 十 昔の昔はくはくはなれはる 羊角
 去身白くは越向の連はは依りて風あり是れ
 いふはくはくはくはなれはる 羊角
 去身白くは越向の連はは依りて風あり是れ
 いふはくはくはくはなれはる 羊角
 去身白くは越向の連はは依りて風あり是れ
 いふはくはくはくはなれはる 羊角

僧より別々さまあちあり去来曰聖田粟一俵の
句とくくしむむせしむる句あちありくせむ
あり

(十六)

電イナヅマ

支料支老とも曰下の五文をよきう田つ
何れかみさくし去来曰花をよきうすた宮お
なりあ士曰最の句うて拙く偏す存支料
子語て曰退て思ふにあさ電の句とくく
あん只電の存の園あの句也故に
中々の支料曰さくくハ心けさくく
(十七) ほいさす帆直さすや夕あられ先放

とくくめハ下を明名深くくくく後集子あ
可南曰くくくくく故も去来曰時を帆直さ
かくくやさくくくく景情たあはくく子
もくくくくくくくく可南曰同集子
卯七う子親しめくくくくく去来曰卯
七う句とくくくくくくくくくくくく
香句とくく向をニくくくくくくくくく
下をくくくくくくくくくくくく
(十六) くくくくくくくくくくくくく
評六曰見を説評くくくくくくくく
くくくの類之又曰くくくくくくくくくくく

⑤

夕々れは鐘をもちて寺の秋 風園

けふとくしめを晩鐘のきりりぬりし句なり
句をえりし風を日は深山寺の晩鐘をきくふ
曾てとくしりし句依て他を去来白見殺風景
なり山寺しりし秋のゆふをきりし晩鐘をきりし
寂しきものの頂上なり去来を一端遊典駱
動の内を聞てきりし句依て他をきりし句依て
風を日は降は信ありし句依て他をきりし句依て
しきりし句依て他をきりし句依て他をきりし句依て
んし今の句をきりし句依て他をきりし句依て
へんがまをきりし句依て他をきりし句依て

⑥

應くしりし句依て他をきりし句依て 去来

大物曰不易しりし句依て他をきりし句依て
曰くしりし句依て他をきりし句依て
先師のゆふをきりし句依て他をきりし句依て
思ふしりし句依て他をきりし句依て
其角曰雪の門に許六曰を好句しりし句依て
十分ありし句依て他をきりし句依て
の評亦れりし句依て他をきりし句依て
の冬に句依て他をきりし句依て
へんがまをきりし句依て他をきりし句依て
⑦ 幾年のまじりし句依て他をきりし句依て 去来
大宰府奉納の句依て他をきりし句依て

用るる法ありはうたも子ニツの病あり去来曰吊
るる切も子ニツありんころりきしころりありん
これとや字も用ひすんを昔かじ

廿三

ふゆの戸板ねむいれ山の中 助童

去来曰けうたも子のふあふふ里^人傭^事よとて
世なるあやう句作風波あり語路借す情
移るるあき事ありし高村はりのたれ
あり世上の句おほくは免す故子角はあれ
と向中まありあひ或は目のあをいかにすん
地の井ともあり一燕暖庵の下くはかなの
有りけ見け下地ありくよる所はまういり
そころの地者より至るむむ一はまのし中十里

居たりあきり一あ切のむもくもよおんて
又いりそころの之理いひまうならん物之

廿四

しんや尻もるる鹿の歌 本道寺

許六曰けうた入鹿のあしゆあつたの上
いへるあきり去来曰ゆはらの新らおれ
山子陽とや色といへるこれと鹿一伴なる
さかといへる趣意各別くはるまは

廿五

唐黍よりけうたおやまつる 酒堂

路通曰鹿黍より粟より得もたらしく一炭白と
けうたも子也去来曰路通いりし向れは家
とては故にけうた野のあきり火穀のむれ

あやをひてやめる句也は句と其類あるもの
なり

世一 あまうほれ第もちく男の 風毛

魯町曰此句或人の長点也いへ去来曰豊後句
といへといへ人の杜年曰先師の「軽教不
あまのく甲かといへるやよ季のあはれや
去来曰先師の句と其角う豊後堂の句と和
いへるや飽まき巧なる答の句と句の上よけい
外一答るや子趣あり風毛句句はよの存表重
一のんへまお外一秋のこま句はよといへ
けしやまおなりころころは飽てんせん題を

眠

おきこれよ魯町別露の句を乞へるをるて襟ふ
ころもこのまき木陰に又兼の題をよへる兼
いへるやあ根のかさうや山田と十歌十句言下
子賦一美んといへる句の紫もあへん一題ゆきて
十句せんといへる魚目所破といへる娘より嫁の音
よるまに破れいへる掛の眠をよる寸破れを破れ
十句をよるたす寸平八蕉門ほはれ一の名ある
すう初の一と一況や集もよる先師の句をよる
各よののあつといへる一と一去来曰は言自ら
いへるやあつといへるやあつといへるやあつ
兼の句或をよるはといへる木槿八馬よ答れなり

白体のまじりのゆるふまのひくあらむのまの白を出
出し芭蕉流のたらしきなる族ありを筆にす
せんこのあらむを記しゆる

廿二 年ちやちのれを目に目に
え日やおつしるれ歌をすす 其角
き米

許六の後ふ高射え日しりふ冠用のまに部あり
を難とし一き米曰え日ハ嫌ふまな子ありの
やのま子ま懐あまこゆけ難らく一は白え日
といくんゆめハ嘆羨一くらハ詞なり
許六曰其角は白を吟し一米といく一歳且
一あらむえ日ハいひまのいくらハ言なり一是所

曰きくらハ他者のくらえ日ハいくらハ物なり
とく年まなるといく一といく一許六曰心のま子嘆
羨のまりあり一といく一といく一習俗
るき米曰角は白を吟し一米といく一といく一
一一といく一といく一といく一といく一
作者の甲しを吟してはあらむ已しといく一といく一
子遠ありといく一といく一といく一といく一といく一
又は新詞を吟してはあらむといく一といく一
嘆羨のまりといく一といく一といく一といく一といく一
嘆息嘆羨ありといく一といく一といく一といく一といく一
治定といく一といく一といく一といく一といく一
一本といく一といく一といく一といく一といく一

去来曰此句六十七八年その句廿のそは先師
も考やれ世よままあも 句也を事新
しく感原しむ句の位を論らるる
甚下品也いま蕉門の俗な中世傷よと守
られと考やれし中却り今日乃連歌師
考れもしむねの也

廿六 志く海や紅の小袖を吹くへ
正秀曰いんも考やれし類や去来
正秀の句層也去来曰正秀の評いよ解
けりるたり考れも正秀の語よその
小袖吹くへし考やれしお世吹くす山に

ろ乃風と詠るる人の俗語なり
傳らるる

廿七 ちの乃おのこた丁と志く海
生鯛のひちくすを甚よの也
と考へりやらるる之也

去来曰は附句甚よの也いんあこのころ後解
極^{キツ}けはちと考やれしひちくす
けあも考やれし次附句あもよ
か考やれしひちくすなり也て一句にひち
くす考やれしひちくすなり

○一本頭書よ花實集小袖のいのこと乃句のあ

文あり其の文曰去来日たてふ百員六一坐乃
百員より十人の連中なる十人の百員也
さゆえあむらひ好句ありて一巻の指子小
道ふら文章をたてあふの歌を名真にたて
こころあり

⑥ 梅の花希いぐらあふいとふ 惟然
去来日惟然坊う今の風たふこの類あり
是あら句ふらえ守先師近代の年のな惟然
坊う俳諧を導守坊ふ其茶の口賃のをもよ
りすあてし孫際よとありくと唐もつて
或ハ一松の本すすし〜風の吹けりたし〜

天和二年武藏田

いよをきり〜坊ふ又修徳を築てをひてを分
別子他守〜のよひ示はたよく風体
うろろ〜のよひなる事をもゆまよひ家
う坊ふ〜け〜自の集り哥仙の坊ら妻よ
雛子の乳を細ふ〜あつら〜の雪の白
た〜評〜坊ひ者〜句傍句姿〜いよの
あ〜も〜みふ忘却〜新〜見え〜
⑨ 行す〜見五湖葵蛸の音をき 素堂
坊ふ人の少神もいまる玉用なり ちせ
素堂子の句ハ源川芭蕉菴よれ〜坊ふ句こ
先師の句をきり〜妹子子身も〜坊ふ徳の

天和三年
貞享三年

○又一本大物曰の...
初ら...
去来抄

去来抄

故実

○又一本大物曰の...
初ら...
去来抄

○卯七日先師の...
成程...
長...

ねく目より引上るるをうんだんのはれを是の事ハ關心
の事或は常の種をばはらふかゝるある人一人あつた
花ありは是ハ花一向とねのふ人の白くありて我の
あやうきをばはらふをばはらふあり

七

卯七日猿のふたを様をかへてはらふ事ハ白く
甲の種をばはらふ人云々師曰故ハふ事ハ白くは
さしてふあはらひてはらひてはらふ事ハ白くは
茶の出をばはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くは
よるふありははらひてはらひてはらひてはらひ
あり先師曰はらひてはらひてはらひてはらひ
いふ事ハはらひてはらひてはらひてはらひ

君の常の種をばはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くは
さしてふあはらひてはらひてはらひてはらひ
さしてふあはらひてはらひてはらひてはらひ

八

卯七日蓮の種をばはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くは
ふの事ハ何ハ師曰古ハ其意の白くはらふ事ハ白くは
二白くはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くは
乃意の白くはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くは
の白くはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くは
りてはらひてはらひてはらひてはらひてはらひ
汝等と云ふ事ハ白くはらふ事ハ白くはらふ事ハ白くは
はらひてはらひてはらひてはらひてはらひ

又事類百類

とくも意の向ふものなり一巻はいづれはいづれも
かたより大物するありれ意の向ふものなり一巻は
おきと幸しく却て巻中意の向ふものなり又多くは
意の向ふものなり一巻はいづれはいづれも
はたし意の向ふものなり一巻はいづれはいづれも
附けかゝるものなり一巻はいづれはいづれも
よむものなり一巻はいづれはいづれも
なむものなり一巻はいづれはいづれも
思ふものなり一巻はいづれはいづれも
あはれものなり一巻はいづれはいづれも
まぬものなり一巻はいづれはいづれも

九

九外七曰蕉門の書は月用ひはるや幸生向はるなり
酒堂曰源川の金ふも書の向ふものなり一巻は
白申は月あり外は別の白紙をんは扱あるなり
と云は月あり月あり扱表は月ありんもたは
月次の月あり字は入らるものなり一巻は
事しはるものなり一巻はいづれはいづれも
予曰先師はは是武をさるものなり一巻は
先師の書は月あり月あり扱表は月ありんも
何の書は月あり月あり扱表は月ありんも
守りはるものなり一巻はいづれはいづれも

子細ありて

⑩ 野村曰東武の余に金盃新教を以て風を乞
と難し先師曰金盃を新教といふは神祇を
るから也 戸部角をいふは道守とあはせるは
をあらん 丁より新教なりといふは己に金盃を以て
教をもち申えたる不類ひの事なりと不審と
⑪ 孝生曰洋六は名月の明の字を海とるは六月十
日おとせも也 清の詩に用事ありて今その
本意のある字義計をいふ用事ありて高直
不二を野とせ方野とせぬ 孝生とて遠明の字を

まことありて 明の字を書て昔か

洋六は明月は月十五夜は和交の類名列之明月
とらおの月の事と名月と明の字書は未練とて是
海と極とる名月と明の字書は未練とて是
放歌ありて名月と明の字書ありて未練とて

⑫ 洋六曰村由六もか 本意は清なりとありて野の
清なりとありて村由の字を教ひては未練とて
未練とては 作とるを名月と名月と名月の
秋の字もよとて清なりとありて未練とて
ありて清なりとありて未練とて 清なりとありて
未練とて 清なりとありて未練とて 清なりとありて

先師の句より初く入らるるた年のまよふすゝまよ
れりまよものあゝと撰ひ用ぬる先師曰まの藤の
一と撰出さるる八は世よよも賜也塔まの塔
た年のまよ藤のたの藤のまよみ月二十日まのま
まよまよとて可南の句まの藤一は也

① 卯七日先師より二人形より小文書後より一はまよ書
より史部をとりてよく写のまよ先師の指家寸法を
出さるる藤まよとて初よりまよより文書正抄より
そのち門人写しつる今

② まよ白先師曰藤のまよのまよ和文の文史深あは
おたる心作まよのまよとて也まよ先師のまよ

藤まよとてまよみ形藤まよ月日記まよの日まよと藤まよ
葛の根系まよのまよ又藤まよまよ

まよ白藤化まよの時よりまよ藤まよとてまよ
先師曰み形まよのまよまよと藤まよ一は藤まよ
と藤まよ一は藤まよ曰藤化まよ藤書の名まよ
詩和史文を分は藤まよまよまよ曰まよは藤化詩
人まよと詩集まよ一は藤化者まよとてまよと藤
藤まよといまよまよ

去来抄

修行

不易流

一

去来抄曰蕉門より千歳不易の句一時修行の句より
あつしをとりて方々教へたる其基ハ一也不易を知る
さねて其基をわかつて修行を知るさねて修行を知る
不易のちよあつし修行の句千歳不易の
いふ修行ハ一時の修行の句今言はるる
今言の風吹くころ角ひききかたに修行の句
たをふ事といふ也

魚の所曰修行の基をいふ去来抄曰修行の句

魯西曰流石の句はさうも古本曰流石の句はさうも
おれをさあつてさあさうなり 形容衣装の句はさうも
おれをさあつてさあさうなり 形容衣装の句はさうも

おすまゝにさあさうなり 形容衣装の句はさうも
おすまゝにさあさうなり 形容衣装の句はさうも
おすまゝにさあさうなり 形容衣装の句はさうも
おすまゝにさあさうなり 形容衣装の句はさうも

或はさうもさあさうなり 形容衣装の句はさうも
おれをさあつてさあさうなり 形容衣装の句はさうも
おれをさあつてさあさうなり 形容衣装の句はさうも
おれをさあつてさあさうなり 形容衣装の句はさうも

魯西曰不易流石其之句はさうも古本曰其事
かゝる人傳はさうなり 形容衣装の句はさうも
流石の句はさうなり 形容衣装の句はさうも
一時の事はさうなり 形容衣装の句はさうも
之は同じ人も

魯西曰不易流石其之句はさうも古本曰其事
かゝる人傳はさうなり 形容衣装の句はさうも
流石の句はさうなり 形容衣装の句はさうも
一時の事はさうなり 形容衣装の句はさうも
之は同じ人も

白鳥とてりも事一す

貞園と書けり門も女を自り

遊あり蓮の空に翫く西に居る 玉堂

先ホハ詩く後々又文もあふ余のこもあす余も

ちんつらまたいらいゆ 雪のうら 幽山

は弓の謎也鳥曰ゆ諸言の謎の体も事と事と事と事と

とこれとゆい言解ゆら出りぬありとらと

鳥曰白之師也其全より出る風行や事と事と事と

羽の肉もあゆみありけり師の肉もまたあゆみあり

白ありはゆかぬの二事と解りぬこと Omra Omra

夫師の白もたぬまの指ありと事一冊年の冬物へ
不易流の教と流あり

魯曰白不易流の白ハ古流と事と事と事と事と

事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

先きり小人好し 吾願九事と事と事と事と

流部一箇様や傾るの事と事と事と事と事と

玉露寺と事と事と事と事と事と事と事と

の事と事と事と事と事と事と事と事と事と

宗因作つて事と事と事と事と事と事と事と

影風と事と事と事と事と事と事と事と事と

物と事と事と事と事と事と事と事と事と

都鄙の家通と事と事と事と事と事と事と

一と流しを起すは又その旨をあらわす所の
して時をあらわすは道と云ふは師の傳授の
本傳と云ふは易の句をとりて又凡ハ時を
取らぬ事と云ふは流りの聖なるを教ふ事
と云ふ師の言は上宗字周如くも我々の傳授
今ハ身徳の徳と云ふは命一宗周ハ世
道の中身の開山と云ふ

不
易
評

二大判曰不易の句は何時を辨せぬと云ふ
是し又流りの句はいつか
是の傳授の時に來り曰はしうは海にさうなる風あ
らざる風ぬか唯不易の句と案しん

孝子曰蕉門不易流の流あり或今の有
くハ上流に流あり是も流のあり流に流す
不易の流の教しハ世道本傳の意を
の事なり

時代を
知る事

三孝子曰人を流すは人自らむかひ時代
風流の傳と能く考ふは是を云ふ時
新古自らそのれをあらわす也

是連の
句なり
事

四孝子曰人の流る者たの教あるは流
の句は一に流るは一は不書と云ふ難
其傳ありて若くは孝子曰あるは流るは
らんをまはし或切者なり流るは流るは

とておぼしむるもいふて人の白もはげゆるものなり
一与いことあるかち成化者ハ冷味のさち月日か
形くく子ハ巧の成ることを成化者曰今のをい
ふい日以下子史を付て席下をさるる氣をを
以て吐へい顔子さるるをいふなり

如來禪
祖師禪

支考曰昔ハ海濱ハ女生禪の如一人の成化者祖師
禪の如一捺着とて成化者

教據
子よるる

六 去来白と師ハ一人教者ハ子よるること
まじりあし一節ハ一節ハ子よるるなり
このまじり又て一人ハ子よるるなり
凡此ハ一与儀ハ子よるるなり

とていふは子よるる一節ハ一人ハ子よるるなり
やれ儀ハ一と也ハ成化者の宗性ハ質素
なりあし一節ハ一節ハ子よるるなり
ハ申是ハ子よるるなり

二
とていふ

七 先師曰不白ハ顔よりすしりて顔に
とていふ先師曰不白ハ顔よりすしりて顔に
とていふ先師曰不白ハ顔よりすしりて顔に
とていふ先師曰不白ハ顔よりすしりて顔に

五
とていふ

八 先師曰不白ハ物と合さるハ物
とていふ先師曰不白ハ物と合さるハ物
とていふ先師曰不白ハ物と合さるハ物
とていふ先師曰不白ハ物と合さるハ物

九 許ハ曰爰ハ不白ハ物と合さるハ物
とていふ先師曰不白ハ物と合さるハ物
とていふ先師曰不白ハ物と合さるハ物
とていふ先師曰不白ハ物と合さるハ物

あつと人かきすや

十 去来白物球をなげ伝きつ時ハ白きく吟速なり
袖子の人気とさへ一功者成る人かきすやあ
たきとの端さあは

歌の
曲の
曲の

十一

許六曰く白ハ歌の曲端とむおと伝き一廊の内ハ
あはれ物之白物曲端内まあハ天かたて希く去来
曰き白き曲端の内ハあはれ物之あはれ物之真
感偶々ものハ多ハ内なり此れハ去来あはれ物之
多ハくハ去来ハ糟粕也千里かけ出れ吟速なり
白き物のことあはれ物之類とのこと風ふらふらふ
毎句曲端の内ハ白く示さし電子徳利とて毎句

とを徳利とてけがらむとあはれ物之あはれ物之利

ものことあはれ物之利とて約近とてあはれ物之の

をたつことあはれ物之巧者又内外の端とあはれ物

白の
曲の

十二

去来白物球をなげ伝きつ時ハ白きく吟速なり
蕉門ハ去来信たふ其のあはれ物之吟速ハ蕉門ハ
あはれ物之あはれ物之あはれ物之あはれ物之あはれ物之
え目のあはれ物之あはれ物之あはれ物之あはれ物之
とてあはれ物之あはれ物之あはれ物之あはれ物之
あはれ物之あはれ物之あはれ物之あはれ物之あはれ物之

他
切者

十三

去来白蕉門のあはれ物之あはれ物之あはれ物之
あはれ物之あはれ物之あはれ物之あはれ物之あはれ物之

あし此流の甚流の功者ありさるもそ流の好句は
ぬか〜〜〜

新義

④

去来曰依流の新義も〜〜〜物本性とし
〜〜〜寸若き〜〜〜思を存之の感時死
の感時情別を發心或極ま〜〜〜大
文人の事〜〜〜感時特別特文人の〜〜
の眼⑤去来曰依流の火と水と〜〜〜佳情〜〜
ひ〜〜〜の〜〜〜か〜〜〜苦〜〜
〜〜〜人〜〜〜心〜〜〜心
〜〜〜雪の日に〜〜〜句と能〜〜
〜〜〜笑か〜〜〜教を〜〜〜流〜〜

火と水と
ひのひ

ひ類

新義

⑥

去来曰句案に京あり趣向より入るは
あり河をさ果より今人故句案句は
人さほみ寡句さ〜〜〜位を満〜〜
〜〜〜上果〜〜〜入事ハ和号流の〜
〜〜〜

日寛

⑦

去来曰舊同は同寛電より〜〜
乃〜〜〜保〜〜〜
刀の〜〜〜
月一寛の句は柄が〜〜
〜〜〜

⑧

去来曰句は句智〜〜
〜〜〜

白乃

たるぬれいひさし今も先師の侍とあてて流る地
押すさくさく

赤人の名にほそり 祐兵衛 史邦
舟に乗り合ふさるる

先師曰くゆりしはにほひいひ減去年中
二十持さしけし

去来者曰くゆりしはにほひいひ減去年中
舟に乗り合ふさるる

細音ハナハにさるる

舟 極限士窓にさるる
さるるさるる

先師はさるるさるるさるるさるるさるる
よらひけさるるは方し法めへる一
善くいひおろかまお者破せらるる
附句のほろろいろ事や去来者曰くゆりしはにほひいひ減去年中
位とさるるけし事く強きハ好句ある位
はれそのは先師の意句をまあはし法め

よさるの干草本はさるるさるる
馬よおぬ目ハ肉くさるる

けさるるハ人の書はさるるさるるさるる
宿を問ふさるるの下女也

細き目よさるるさるるの頬をさるる

世宗様とてちし袖の端ちし

糸白古代めしきり人のありさめし

おろいをねねもち地とるん顔

役者もやの袖の葉もあ

あふ今やとんちの女とるん也

尾子ねえささ月のさめく

月影は陰をゆるみ人さし

糸白いしねねさき身土の妻とるん

かすぬはらしてはふ油

掛えはさめの人とももをさや

糸白所居の藤えまといふすさそひて代をねさし

西新世

杜年曰西新より附るはらく去来曰つり宮白ひは

所居の地梅く面影はねの事さ昔はさ其事を

あまけりつりし事侍を附るにねえして

さの唐よりけりてくち破り

袖糸のうの團我をさすけりて先師曰糸を西に

能因の境界をさすねはらくも西に附ひ

手はあらん只侍を附るにねえはらくも西に附ひ

侍ありんて又人をさすけりてあまねえ

祭心のくめは神の陰麻山

内影の顔がひさる誰

附あ
のり

⑥ 先師曰附のりはけり年尚幼好まらざる
附あはるはあかかんときりつらつら附あはる
附あはるは又も柄なるあはる

十七
乃附
方

⑦ 宇麻曰先師十七の附方政通子傳更し傳白
去来曰遠境の門人の願ふもあつ附方を書
却し孫ふざん後くをせ成り附方ハ是り
限りつらつら人の迷ひあらんを捨らけり
其の書もわし孫ふざん十七條をよんゆめり
是を傳更し孫ふざん事とあつ大津の事と
や流るる政通りてるを捨ひて人教を
許さ曰は事を伝ひつらつ干那は師あ

附き
このり
り

⑧

去来曰附白ハ何事も形くさるるも
卷をよむは思案子まし付句法や
去来曰風ハ千夜万化し付句法新清
正百字用和剛解懐速連也付ハ
鈍濁弱重薄淡志つらま堅騷
古きのみあつ堅白とん形く白ハ名
支考曰附白ハ付句法新古
去来曰古風の句法用は場まあつり
古風の伝はるは古体のうち今根ま
先師曰一卷まあつり名法を一傳
去来曰一卷まあつり名法を一傳

附古

⑨

支考曰附白ハ付句法新古
去来曰古風の句法用は場まあつり
古風の伝はるは古体のうち今根ま
先師曰一卷まあつり名法を一傳
去来曰一卷まあつり名法を一傳

附古
世二

名前の表はよきおぼえの曲もよき一はあ
の直表は拙くはきりいりおぼえふ能く一未だ
つたりひは退をわきまらね好句あること
却て句とあり名おぼえもあつた末に
いふことあり好句のあつたこと
好句とありおぼえもよき事

其角曰一卷了我句九句十句何れも三句好句あり
よしおぼえ好句とせんことおぼえよき事
之いふ好句あること内を随ふ句とあり
附あ 又の後
世五 去来日附あのとくはた本苗村輝ひはれおぼえ
あつたこと今一書と一三句ありこといふはれ

あはれ
の附あ

世六

浪化曰今の化語はおろしき用事ハひり
去来日おろしハ一書と一三句あり句は
人の小御門の鍵もつ守のあつたは撰集の時おぼ
えの句があることおぼえよき事
去来日おろしはれあり風あり風必多はれおぼ
えの句は風を結ぶこと一風とありこと

あはれ
一頁止

世七

まき事はれあり候今先師の風とあり
よき事とありおぼえよき事
世八 杜年曰去来日おぼえハひり去来日去来日人の
感じありこといふこといふこといふこと
やいふこといふこといふこと

あはれ
の附あ

世八

附句
附句

杜年曰養句と附句の境は子去年曰七情万系字
やいふるふする句あり附句は常に存するその梅
まをりて鳴くといふる句は子去年の句といふ
しよれはつとていふる句

附句
附句

杜年曰やよとあるは存する句は子去年曰
はるもつる句も如くあるは存する句

はきいぬや植のつまり此は春 好春

は句とて附の古の情を如く存する句といふ
事ありて存する句は存する句といふ
らんは存する句といふ句

附句
附句

野の句は存する句といふ句は存する句といふ句

句のうも困窮ある句は存する句といふ句は存する句
甲冑を帯びて戰場に傷を添ふをかくり御あり
侍るも老の境のある句は存する句といふ句は存する句
ある句もあつた今一句を尋ね

先師曰密びきよりあつたは存する句といふ句は存する句

附句
附句

野の句は存する句といふ句は存する句といふ句

卯の句は存する句といふ句は存する句といふ句
之師曰句といふ句は存する句といふ句は存する句
位たりて存する句といふ句は存する句といふ句

新風をねらひて思ひく一夜天下の御人をねらひ
てん物事世傳老の海日いふちをうらな
風雅な指さすまはるるたれはたし出れ多思ひ
しるふのこころ素堂子いし師の古友將賢
賢者の人ありかより世に能名をいし近年
はたおれおれいふも又いふおれ風流を吐
きし人おれいふも中意ふる事也

去来物語

花實集の内去来物語の事いふこととて極
其う角曰凡おれいふこととて極いふこととて
時よよい思ふ事いふこととて題の白とて
も外に讀むこととて好む事いふこととて
いふこととていふこととていふこととて
中にも好むこととて花實集の事いふこととて
凡物に基原いふこととていふこととて
中にも好むこととていふこととていふこととて
それの中にも好むこととていふこととて
或は好む事いふこととて梅様御事いふこととて
いふこととていふこととていふこととて

清水蟬暑或ハ立秋七夕ノ秋風砂虫嵐おそ丁
葉の葉あやうき或ハ時由おれおる 拙柳の月
拙柳の火種紙に既巾 巾のり一を巻等むら一
昇火に能向はるハ実不御能の向おるるらん
そくくハ花蛤とむり或ハ横意筆入のれく
いらぬ向うぬらうて安堵の浪あゝのなぬ
いハ深せく何程のち梅さしあつたハあふら
せぬハあつたハ撰集のすむハあつたハあつた
拙柳の向うはくわんらんハあつたハあつた
毎年の巻をハあつた

又ハ用田あつたハあつたハあつたハあつたハ

地はた〜 秋ハ秋の地は〜 附ハあつたハあつた
風のあつた〜 是ハ御能のあつたハあつた
又ハ用田あつたハあつたハあつたハあつたハ
拙柳の向うはくわんらんハあつたハあつた
そくくハ花蛤とむり或ハ横意筆入のれく
いらぬ向うぬらうて安堵の浪あゝのなぬ
いハ深せく何程のち梅さしあつたハあつた
せぬハあつたハ撰集のすむハあつたハあつた
拙柳の向うはくわんらんハあつたハあつた
毎年の巻をハあつた

ほまよりほまより
先作もあま

其角曰人徳人徳
そくはうま
人の忠人徳
子孫の徳
ふりんと
中
帝破
卷教
破

あまの徳
其角曰

其角曰一
拙
却
社
跡
也
い

去来曰生所能造は老存の生くまはるは徳ま世中の
徳造る年能造ある物の所はくまはるは徳ま世
く人友のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
却る老と徳けらるは徳ま世のくまはるは徳ま世
人の時直まはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
老くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世

去来曰能造は向まはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
向まはるは徳ま世のくまはるは徳ま世

去来曰人各も徳あるは徳ま世のくまはるは徳ま世
向まはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
長く風神の徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
何れもあまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
心くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
人くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世
くまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世のくまはるは徳ま世

心手合一

榮煥之子

寬里謹寫

白行菴

宣統校志



海草

宣統年

竹人



石山夜書

求



